

私は福島県いわき市在住で震災の直接の被害は皆無だったのですが、福島第一原子力発電所の事故、それに伴う一時的な自主避難などや、食料品や燃料など生活物資の不足、放射性物質への不安があり、震災以降、自分たちのことで精一杯の毎日でした。現在も生活の拠点を県内に置き続けるか逡巡する毎日ですが、時経つうちに、被災3県のほかの県の様子や、復興の進捗状況を見に行きたいと思い、ツアーに応募しました。

1日目は遊覧船での松島めぐり、瑞巖寺などの定番コースは震災の影響が少なく、見る限り震災前の賑わいに戻っているように見受けました。夜のホテル一の坊での懇親会では宮城県の校友の皆さんが銘酒「浦霞禅」を振舞っていただき、会は大いに盛り上がり、新たな宮城県校友会の皆様との新しいご縁もできました。あつという間に楽しい時間は過ぎ、話し足りないことは多々ありましたが、続きは今後いずれかの機会に再会できるときの楽しみにしています。

2日目は沿岸部の南三陸、石巻、名取市と沿岸部を巡りました。南三陸では高台の復興市で地元の産品を買ったり、同市のテレビで有名となった鉄骨だけが残った3階建ての防災庁舎を目にしました。以前の町を見たことがないと、津波の瓦礫を撤去したあとの更地となった地区を見て、以前からそういう何もない町だったのかと思うかもしれないが、土台の跡を見ればそこは密集した町だったことがわかるでしょうというガイドさんの解説を聞いて、なかなか被災地に行っても飽くまで観光客であって、実感として被災者の思いに近づくのは難しいと感じました。復興をなんだかんだ美談に仕立てるのは容易ですが、被災者の心に負った傷や悩みを理解するのは難しいと実感しました。瓦礫はなくなったけど、なかなかその先が見えず、仕事を求めて町を去る人が多くなり、地域社会が消えてゆく現状を、その更地となった風景は無言ながら訴えているように見えました。

先が見えないというのは福島だけだと思っていたのですが、被災3県は三者三様に先が見えないのは共通だったという認識を持ちました。今は復興への踊り場の時期で、そうした時間も無為無策でいたずらに過ぎていくわけではないのですが、復興へは長い道のりの途中という印象を受けました。被害の少ない地域や復興のピッチが早い地域、復興特需に沸く地域もあれば、復興が進まず取り残されている地域もあり、復興格差は新たな問題となっています。

今回のツアーの中心となった復興委員の方や参加者の多くは、最近卒業された比較的若い校友が中心となっており、もちろん大先輩もおられました。若い校友の意識の高さに立命館校友の頼もしさを覚えました。宮城県交友、復興委員、参加者のみなさんに今回の旅を有意義なものとしてくださったことに感謝します。